2018 年 10 月 17 日放送

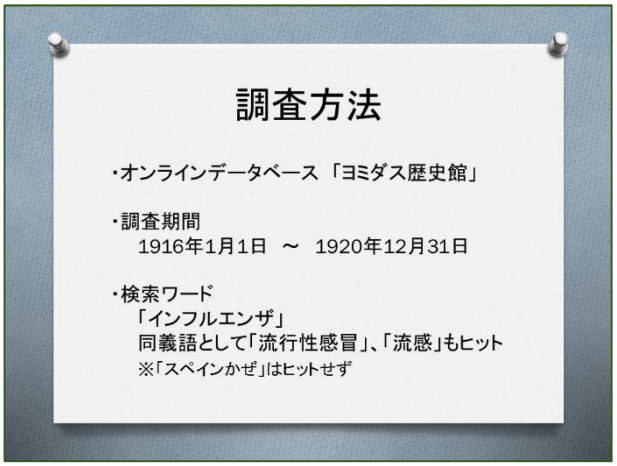
100 年前のスペイン風邪を新聞はどう報じていたか

読売新聞東京本社　編集局　医療部
記者　森井　雄一

100 年前、1918 年に流行が始まったスペイン風邪を、当時の新聞はどのように報じていたのでしょうか。100 年前の読売新聞をひもとき、当時の記事を紹介します。

まず、スペイン風邪について簡単に説明します。スペイン風邪は、1918 年に始まったインフルエンザのパンデミックで、全世界で 4000 万人以上が死亡したといわれています。致死率は約 2%と高く、恐ろしい病気でした。国内でも、当時の人口 5500 万人のうち、2300 万人が患者となり、38 万人が亡くなったという記録が残っています。ちょうど第一次世界大戦の最中で、兵士が戦場を転々とするなかで広がったといわれています。戦争に参加しなかったスペインでの感染情報が世界に広まったため、スペイン風邪と呼ばれるようになったようです。

それでは、当時の新聞の紹介に移ります。今回、記事を引用する読売新聞は、1874 年に東京で創刊しました。1920 年頃は、東京を中心に約 5 万 5000 部、発行していたようです。

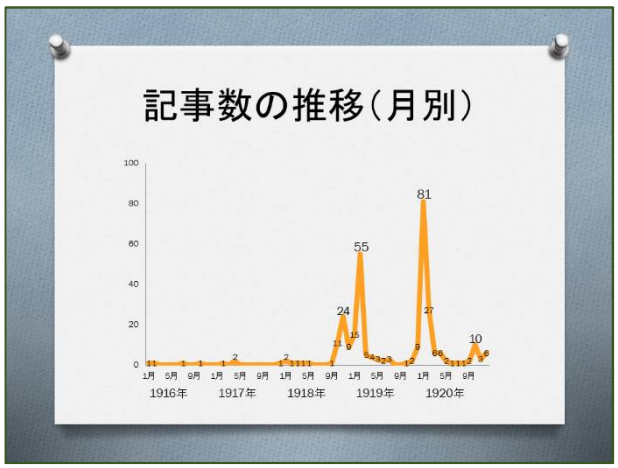


記事を紹介するにあたり、読売新聞社が提供するオンラインデータベース「ヨミダス歴史館」を活用しました。明治時代から現在までの新聞記事、1300 万件以上を読むことができます。

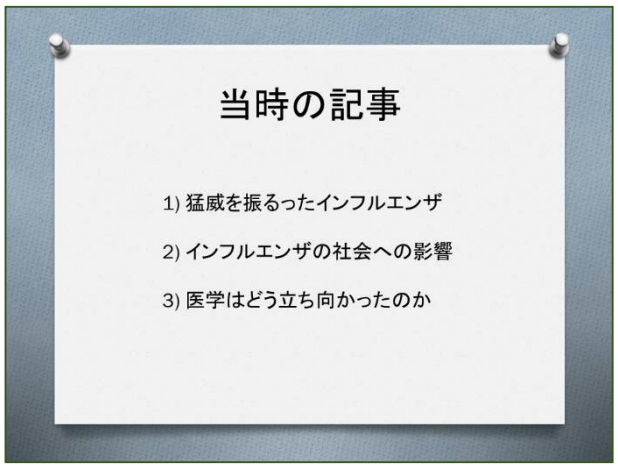
今回は 1918 年を中心とした 5 年間、つまり 1916 年 1 月 1 日から 1920 年 12 月 31 日まで

を検索対象としました。検索した単語は「インフルエンザ」です。インフルエンザを検索することで、同時に、流行性感冒、あるいは、流感、といった単語が含まれる記事も引っかかってきます。「スペイン風邪」は、この 5 年間ではヒットしませんでしたが、スペイン病という単語が 1 件、見つかりました。

対象の 5 年間で、インフルエンザや流行性感冒が含まれる記事は、304 本、見つかりました。1916 年と 17 年は 4 本、18 年は 51 本、19 年は 99 本、20 年は 146 本と、年を追うごとに記事の本数も増えています。1918 年の流行を機に、インフルエンザへの関心が高まったことがわかります。細かく見ると、1916 年から 18 年上旬までは、多くても月に 2 本しか記事はありませんでした。18 年 10 月に 11 本に増え、11 月に 24 本、19 年 2 月には 55 本も出ています。その後、春から秋にかけて少なくなりましたが、再び流行したことを受け、19 年 12 月に 9 本に増えます。そして 20 年 1 月に 81 本と、月別で見ると、この 5 年間で最高の本数を掲載しました。



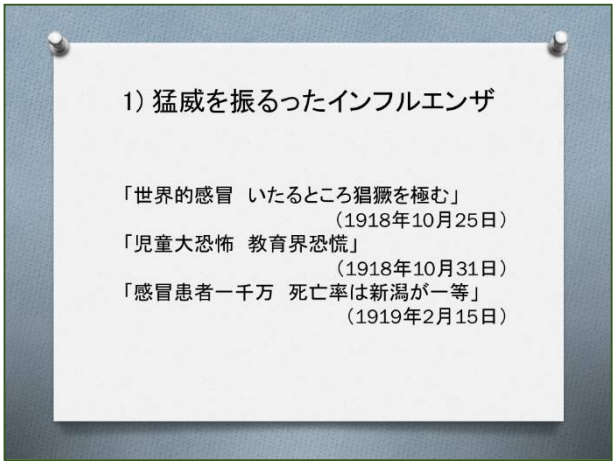
今回はこうした記事を、内容ごとに 3 種類に分類して紹介します。1 つ目は「猛威を振るったインフルエンザ」として、当時の流行の大きさや死者数などが記録された記事を紹介します。2 つ目は「インフルエンザの社会への影響」をまとめました。インフルエンザの流行で起きた事件や社会現象を取り上げます。3 つ目は「医学はどう立ち向かったのか」。まだまだ十分とは言えない医療体制のなか、当時の医師、医学者たちは、どのようにインフルエンザに対峙していたのか。こうした記事を拾い上げました。



それでは、最初のテーマ、「猛威を振るったインフルエンザ」を紹介します。

ちょうど記事の本数が増え始めた 1918 年 10 月 25 日の新聞には、「世界的感冒　いたるところ猖獗をきわむ」という記事が出ています。世界各地の様子を紹介した記事で、同じ記事の中には「罹病者　続々たおれ　蔓延　際限な

し」との記載もあります。インドのボンベイ、現在のムンバイで毎日 700 人以上の死者が出ていたこと、5000 人の死者が出て都市が荒れ果てた南米の惨状、学校や集会所が閉鎖されたカナダの様子が記されています。



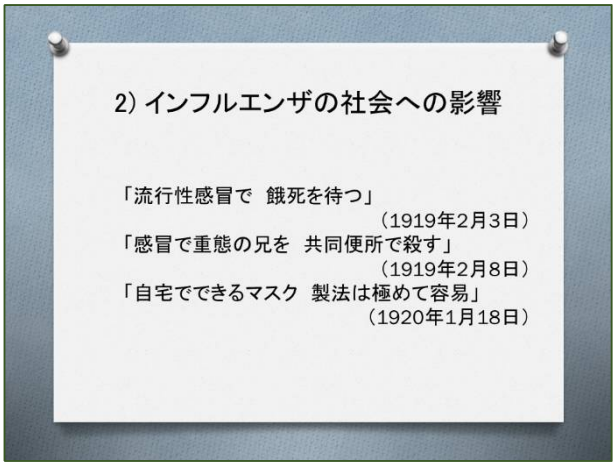
その 6 日後、1918 年 10 月 31 日の新聞では、日本でも流行が広がる様子が描かれています。「児童　大恐怖」や「教育界　恐慌」といった見出しが立ち、教育界が混乱している様子が分かります。記事には、東京都八王子市の小学校がすべて休校になったことや、京都の学校で 7500 人が悪性の感冒にかかったことが紹介されています。

さらに同じ年の 12 月 24 日には、ロンドン発の記事で、「12 週間の流行感冒と肺炎で　死者 600 万人」「戦死者の数の 5 倍に達す」と出ています。内容を見ると、インフルエンザで過去 12 週間に 600 万人が亡くなっており、4 年 3 か月にわたった第一次世界大戦での死者数 2000 万人と比較すると、同じ期間で 5 倍もの人が亡くなった、ということです。

1919 年 2 月 15 日には、「感冒患者 1000 万人」という記事が出ています。死者はすでに 7 万 8000 人を超えた、新潟県の死亡率が最も高かった、群馬県や栃木県では住民の半数が罹患した、と紹介されています。

続いて、2 番目のテーマ、「インフルエンザの社会への影響」に移ります。

まずは、インフルエンザの流行が政治や外交にも影響を与えたことを示す内容です。ともに小さな記事ですが、1917 年 12 月 10 日には、当時の寺内正毅首相が、インフルエンザでの療養を終えて政務に就いた、という記事が出ています。1918 年 9 月 18 日には、イギリスのロイドジョージ首相がインフルエンザで発熱したため、予定されていた会見旅行をすべて取りやめた、と書かれています。



次いで、国内の悲惨な話題を紹介します。1919 年 2 月 3 日には、「流行性感冒で餓死を待つ」という見出しが出ています。東京・神谷町の西洋洗濯業、おそらく、現在のクリーニング店を意味すると思いますが、この店を営んでいた 5 人暮らしの一家をインフルエンザが襲います。家族が相次いで罹患し、主人本人にもうつってしまいます。記事では、この男性が罹患して症状が重くなるにつれて、「一家はたちまち生活の道を失い、餓死を待つありさまとなってしまった」と紹介しています。

1919 年 2 月 8 日には、「感冒で重態の兄を　共同便所で殺す」という痛ましい事件が紹介され

ています。東京・日本橋の共同便所で見つかった遺体は、殺人事件の被害者だったという内容です。同居していた弟が、生計が苦しくなったため、インフルエンザで仕事ができない兄を厄介者とみなし、病院に行くとうそをついて連れ出して殺害した、という事件でした。

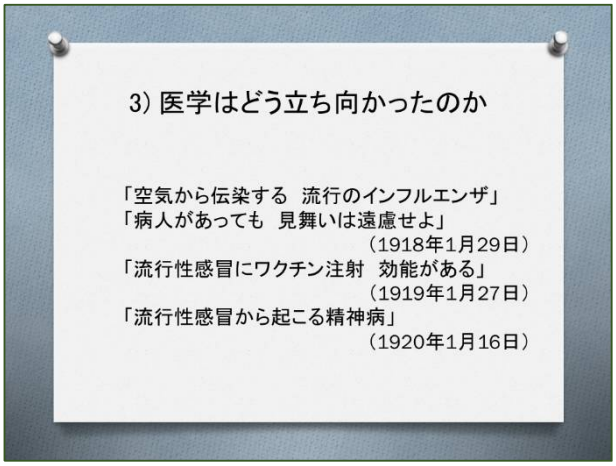
このほか、東京の女学校でマスク着用が義務付けられたことを紹介し、「これからはマスクを着けた美人の怪物が　東京市内に多数　出現するでしょう」と記した記事や、マスクの作り方を紹介した記事が出ています。マスクの作り方の記事には、利益に敏感な商人は、屑切れのような布でマスクを作り、30 銭、35 銭で売っていたが、それでも飛ぶように売れたので、近頃は 60 銭、65 銭に値上げしたと紹介しています。そうした状況を受けて、「こんなものはお金を出して求めるまでもなく　家庭で作ればよい」と主張しているところが、庶民的で興味深いところです。風邪薬が値上げをしたという記事もありました。

さて、最後のテーマは「医学はどう立ち向かったのか」です。

まだインフルエンザウイルスの知見がない時代です。

1918 年 1 月 29 日には、「空気から伝染する　いま流行のインフルエンザ　病人があっても見舞いは遠慮せよ」という見出しとともに、インフルエンザの高熱やさむけ、頭痛、うわごとなどの症状を紹介しています。さらに、インフルエンザの病原菌によって空気感染するため、知人や親戚にこの病人がいても、見舞いは見合わせるようにと注意を促しています。

1919 年 1 月 27 日には、ワクチン注射について、ある学校での実験を紹介しています。注射を打った生徒は健康を維持した、あるいは、かかっても軽微で済みましたが、注射を打たなかった生徒には死者も出た、という内容です。



同じ年の 2 月 23 日には、千葉医専、現在の千葉大学医学部の教授が、インフルエンザで重体に陥り、血清を注射したものの救えなかった、という記事があります。「血清の効力疑わし」と見出しが出ています。この教授は自分の死後、遺体を解剖するように伝えており、3 月には解剖結果として、肺の充血が多く、色は赤褐色を呈していたという記事も出ています。インフルエンザで死亡した患者を解剖すること自体が珍しかったようです。

1920 年 1 月 16 日には「流行性感冒から起こる精神病」という記事があります。患者の中には、大声でわめき立てる、器物を壊す、家族を殴る、家出をする、刃物で自殺するといった行動を起こす人がいるということが紹介されています。

一方で、「カラシを胸に貼ると熱が下がる」「干したミミズを煮たものを飲むと発汗が促される」といった、現在では考えられないような対処法も紹介されていました。

100 年前の新聞を読むというのは、私にとって初めてに近い経験でした。目を通してみると、100 年前も医師や医学者たちは、恐ろしい病気に必死に立ち向かっていた記録がありました。そ

れは、当時の新聞記者が、そうした取り組みを、やはり必死に記事にしていたからです。当たり前のことですが、100 年前の医学の知識は、現在から見ると不十分なもの、あるいは間違っているものもあります。ただ、当時としては正しく、先進的な考えだったはずです。いま、新しい医学情報を伝える私たちも、現在の最先端はあくまで今の時代での正解であることを意識しつつ、「100 年後も正しい情報は何か」ということに思いを巡らせ、記事を書かなければならないと改めて感じました。

「小児科診療 UP-to-DATE」

http://medical.radionikkei.jp/uptodate/